

わたしの文学観

三 木 卓

こんにちは。いま、わたくしのところにもちようど皆さんと同じ歳ぐらいの女の子が一人おりまして、大学行っています。今日こりやって立っておりまして、わたくしが大学生だったのは、昨日のような気がしますが、でもやっぱりもう違っちゃったんですね。本ならそっち側に座って今日の話聞きたいんですが、そもいかないなあ、時間がたっちゃったなあ、残念に思っているわけです。

わたくしが皆さんぐらいのころというのは、ものすごく毎日毎日の時間というのが長かった。高等学校の三年間とか、大学生の生活の間っていうと、本当に長大な時間だったっていう感じがするんですね。ところが、いま二年間なんてわたくしの場合もうあくせくしてますと、アツという間に過ぎてしまふ。それで、二年間で何を覚えてるかという、まるでロクなこと覚えていない。むなしく二年歳とっちゃって髪の毛だけ薄くなった気がするんです。

巨人軍に川上という名選手がおりまして、現役時代のあの人には一番調子の良かった時には、バッター・ボックスに入ると、ピッチャーが投げて来た球が止まって見える、という有名な言葉があるわけですね。球が止まっているんだから、ひっぱればみんなホームラ

ンになっちゃう。そういうふうには球が見えなくて。そのときピッチャーが投げている球は、時速二三〇キロだとか、一四〇キロだとか、ものすごく球を投げていますね。それが、止まって見える。その時にやはり川上っていう人は、時間をものすごく細かく感じる能力を、精密機械みたいに、持っていた人だと思わけてです。

一方、わたくしは蝶が好きなんですから、時々蝶の時間というのを考えるんですが、例えば、いまこの東京あたりにアゲハチョウがおりますと、一年にだいたい三回ぐらい親から子に変わる。最初春型が生まれて、そしてそれが卵を生みまして、親になると、こんどはまた、夏型の蝶が出て来る、というふうになるんですけれど、これが沖繩あたりに行きますと、同じ蝶がさらにサイクルが早くなりまして、一年に六回とか、クルクル世代が交代して行ってしまう。ものすごく目まぐるしいわけですね。

一方、北海道あたりの寒い所の蝶は、例えば、大雪山にウスバキチョウなんていう蝶がいますが、これはだいたい一つの蝶が卵から満足な新米の蝶になるまで、足かけ三年ぐらいかかってしまうんですね。三年ぐらいジッと我慢の子でやっと蝶になれる。

一方、南の方ではですね、ものすごい勢いで自分の命を消費している。年間六回もグルグル回っちゃう。同じ蝶でも各々が体験している時間ってというのは、ずいぶん違うもんだなってことを思うわけなんです。

いまここに立っておりますと、皆さんのいまの時間というのは、わたくしから見ると非常に密度の濃い時間で、大学の二年間っていうのはたいへんすごく長い、いろんなものを頭に詰め込むことが出来る時間帯で、そこに、いま皆さんいらっしゃるっていうふうに思っています。

わたくしはいま、文章を書いてそれを売って暮らしておりますけれど、そういう仕事をしておりまして一番痛感することは、わたくしが大学を出るまでに、自分が何らかのかたちで、触ったりコンタクト出来たりしたこと——ひとに食べられないように干し柿なんか舐めておくってよく言いますけれど、舐めておきゃ取られないだろうって、よくやりますよね(笑)。——そういう感じで、いろんな回りがあることを舐めておいたことだと、後から追っかけて、何かにわか勉強でもするとですね、その時はなかに入って行けるわけですね。それが、後から仕事の中で成長してふくらんで、実を結んだりするなんてことがあるわけです。ところが、青春時代に全然手をつけないで放り出しにしていたこと、もうそんなことまったく関係ないんだから、そんなこと苦手なんだから絶対やらないんだって放り出しておいたことは、いまになって手をつけようと思っても、手をつけようがないってことなんですね……

将棋の大変強い人で、米長さんという人がいます。大変鼻っ柱の強い、天才肌の棋士なんです、その人がこんなことを言っている

のを、わたくし読んだことがありました。将棋っていうのは、結局、基礎を学ぶのは十八まで、十八までに徹底的に学んだことしか、あとはもう役に立たない。そこからあとはただ狭くなって、いろんな逃げ方を覚えたり、将棋の実力外のいろんなこと——実力外のことも実力の内なんですけれど——将棋の実力外のいろんなことを身につける。そういうことで将棋は強くなって行くんですけれども、基本的には十八までに身につけたことで終わるってことを、米長さんが言っていた。

将棋は十八かも知れないけれど、わたくしはそれをいわば青春というふうに引きのばして考えて、一向構わないだろうと思うんですが、わたくしもやはり、そういうことを痛感するわけで、うちの娘にそんなことを言っても、まったく聞いてくれませんので、今日は皆さんにそういうことをお願いしたい(笑)。そういう気持ちでいまここに立っているわけで、どうか、ここにいらっしゃる皆さんは、あと一年以上ある方も、或いはもう半年しかない方もいるかも知れないし、全然ないってひともいるかも知れませんが、手遅れだって人もいるかも知れない(笑)。まあ、皆さん、手遅れの人もあまり気になさらないで(笑)、どうか、これからの、いまある時間の中で、最善の自分の人生の基本の、味の素みたいなものを作っておいていただきたいと、そういうふうに思います。

今日は、「わたしの文学観」という題で話をする事になったわけなんです、わたくしは、自分がどうして文学なんかやるようになったかって、時々考えます。それにはやはり、いろいろな理由があると思います。わたくしの親が文学が好きだったなんていうこともあるし、それから、わたくしが出会った学校の先生方が素晴らしい

先生が多くって、そういう先生方の影響を受けて文学に向って目が開かれて来たということもあった、とは思いますが。そういうこともありませんが、そういうことに入って行きますと、話が少し広がります。書いてしまふので、今日は、なるべくわたくし自身の内側の問題にしぼって、少し話をさせていたきたい、というふうにして思っております。

わたくしは、大変貧乏な詩人の父親のもとで生まれました。生まれましたのは、東京の新宿プラザホテルという、いま西口にありますよね。あの辺は昔、新宿十二社というところでした、十二社っていうのはいささか柄の悪いところだった。三味線がチャンチャンと鳴って、あーら、何さんお見限りねー、なんて(笑い)、まあ、そういうふうなところだったようです。その辺で生まれました。いまの新宿プラザビルのあの根もとあたりをハイハイしてたらしい。どんな貧乏だったかという、わたくしの父親と母親のことを、伊藤信吉さんという群馬県出身の詩人が、「逆流の中の魚」という回想記で書いてくださっていますけれど、あるとき伊藤さんが、かれらをたずねて行ったことがあるんですね。それは昭和七、八年で、わたくしの生まれる前のことだろうと思うんです。わたくしの父親は、森っていうんですが、森さんのお宅を訪ねて行ってビックリしたっていうんですね。わたくしもその文章を読んで、腰抜かしたんです。

わたくしの父親の住んでいたところっていうのは、火の見櫓、火の見櫓だった、上の方なら大変カッコがイイですよ。遠くの方見て、すりばんなんてシャンシャンって鳴らして、火事だ火事だいなんでやっていて、こんな威勢のイイことはないですが、あれは消

防署の方がおやりになる。わたくしの親どもはその根もとのところに住んでおりました。ご存知のようにあの火の見櫓というのは、柱がいたい四本ある。三本というわけにはいかない。で、四本ある。底辺から一メートルぐらいのところに底板を張りましてね、東西南北全部にバタバタと蓋をして、上にも蓋をつけ、梯子かなんかで昇り降りする。そうすると、二畳か二畳半ぐらいの部屋が出来らんじやないでしょうか。電燈なんかは、何処からか線を引いちやえばいいんだろうと思いますが、問題は、トイレをどうしたのかということ、こんど親に会ったら聞いてみようと思ってるんですが、まあ、そんなところに住んでいた。で、伊藤信吉さん、「私はその奇妙な家を見て、つくづく人生の片隅ということを思った。こういうところに、こういう生き方がある！」と書かれた、(爆笑)。

わたくしが生まれた淀橋区淀橋というところも、相だなびどころだったらしくて、隣が桶屋さんだったんですね。桶屋のおばさんが、こんどお宅に生まれた男の子は、あたしがもらってあげようかって言ってくれたんだそうです。もしかすると僕は、大変可愛い男の子だったんじゃないかと思うんですけど(笑い)。で、まだにその桶屋のおばさんには、大変感謝しています。その時わたくしをやらないで、絶対自分で育てるって、キッパリ言ったかどうか知りませんが、とにかくやらないでくれた母親にも感謝しています。

そういう大変貧乏な家に生まれたもんですから、わたくしの兄弟はみんな、病気がちでして、一番上の兄貴ってのが、粟粒結核っていう、小兒結核の激しいやつにかかりまして、いまの中野の組合病院で、昭和十一年に死んでるんです。その下の兄貴はまだ生きてお

りますが、肋膜をやっております、いまでもレントゲン撮ると、胸のところが真っ白く写る。気持ち悪いくらい真っ白く写るんですね。

そういうことで、わたくしも大変病気をしたわけなんです。わたくしは、中国の東北の大連というところで育ったんですが、当時、ここでは小児麻痺が流行っております。その時、小児麻痺にかかりまして、いまだに左足にその後遺症の麻痺が残っています。いや、小児麻痺だけじゃありません。一番最初にかかったのが、腸チフスです。御存知のように、腸チフスってのは、口から汚い黴菌が入るとなる病気だもんですから、家中でいまだにわたくしはばかにされておりました、おまえは、外に落ちているものを拾って食ったんだとか(笑)。

それから、ジフテリアっていう病気をやりました。これ、のどの上に真っ白いもの出来まして、これもまたひどい病気でした。のどが詰まって、死にそうになるんですけれども、これは当時、血清を打つ方がイイというんで、馬の血清打ったりして、わたくしは良くなったんですが、わたくし戦慄したのは、ジフテリアの特効薬っていうのは、馬糞なんだそうです。困ったことに当時の大連の町には馬車がたくさんありまして、新鮮な出来たての馬糞がいっぱい落っこつた(笑)。塵取り持ちましてね、馬が歩いてる後から追っかけてくと、ポロポロって落ちますから、それを塵取りで取りましてね、それをガーゼに包んで搾って飲むとイイって。これ、本当でしょうかね。ちょっと信じられませんが。わたくしそれを飲まされるんじゃないかと思つて、戦慄しておりましたけれど、それは飲まないですんだ。おかげ様でこういうところに立つても、皆さん

にいやがられずにすむわけです(笑)。

こんなふうにものごくたくさん病氣しまして、なんとか生きやらえたんですけれども、左足には麻痺が残った。こういうことはやはり、わたくしの文学観にとっては、決定的な意味を持っているような気がいたします。

わたくしは、いまでも大変オッチョコチョイなんですけれど、オッチョコチョイであるにもかかわらず非常に慎重なところがありましてね、一所懸命慎重になってやるんですけれど、オッチョコチョイだからヘマをしますが、主観的には実に慎重でありたい慎重でありたい、と思つているところがある。それは、やっぱり、わたくしがたくさん病氣をして、何かすると悪いことが起こるんじゃないかというところがあるからじゃないかと思つます。ちょっと何か無理をするとすぐ病氣になつて大連の赤十字病院に放り込まれましたからね。お医者さんがもう、氣の毒がりましたね、お宅はもうイイからつて、払いをマケてくれたつて言います。病院でイイつて言ったの、ウチだけじゃないかと思つます。まあ、それが現実のわたくしでありましてね、親父のボーナスもほとんど日赤に運び込んだようなもので、そういう意味で非常に慎重な子供に生まれつてしまつた、育つてしまつたということが言えると思つます。

そういうわけで、子供たち同士でいっしょに遊ぶつていうのも、やっぱりなかなかうまく遊べなかつたんですね。子供つていうのは冒険したいですから、いろんな変なところへ行つて暴れ回りたいわけです。大連には、山あり丘あり川あり池もあり、冒険するにはかなりおもしろくてオッカナイんですが、わたくしはそこでいっしょに冒険することが出来ない。いつも、みんなと違つて俺はいらん

ことが出来ないなんて、身にしみて味わうようになった。

わたくしの父親は、満洲へ行きましてからは、新聞記者をしておりました。新聞記者ってのは御存知のように、転々とする商売でした、わたくしは、大変よく転校した子供なんです。その間にまた、日本が戦争で負けたってような事態がありました、日本人学校が閉鎖になったり、私立の塾^{わたくし}が出来て、そこに学びに行ったり、日本へ帰って来て日本の学校に入り直したりっていうことになって、わたくしは小学校だけで六回転校しているんです。六回も転校しておりますと、そのたびに、わたくしは新入りになるわけですね。転校生の新入りでいつも小さくなっている。そうするとたいてい、どこかに意地の悪いやつがいて、足が悪いとイジメられるわけです。そういう意味でわたくしは、転校することが恐くなりました。常に登校拒否スレスレの子供だった。ですから、登校拒否なんていま流行っているのは時代遅れで(笑)、わたくしなんかはそのハジリだったんです(笑)。

そういう子供だったんで、わたくしは、そういう意味では、大変室内的な子供だったと思うんです。屋外的な子供になれないで、室内に籠っている子供。で、家におりますと、退屈ですから、いろんな本を読んだり、それからいろんな事をボンヤリと白昼夢みたいに……で、自分の気に入らない餓鬼大将を、白昼夢の中でヤツケル夢を見て喜んだりする。ですから、わたくしの少年時代というのは、片方その夢があつて、片方その夢想と結びつく形で憎悪があつた、と言えんじゃないか、そういうふう思うわけです。いろんな本を読んだり、絵本を見たりっていうようなことも、そこから始まって来ている、そういうふうに思います。そして、そういうことが、わたくしがだんだん文学に近づいて行く、キッカケだったのではないかと。

そこでこんどは戦争が終わりまして、日本へ引揚げて来る。そうすると、学校も新入りでだけれど、日本へ帰って来て、日本の社会に入る。これもまた、新入りなわけですね。わたくしの父親は、一九四六年に向こうで発疹チフスで死んでしまいましたけれども、いわば母子家庭になって、兄貴と母親と祖父と四人で日本へ帰って来んです。一九四六年の秋のことなんです、そのころの日本の状態がどうだったかという、少しでもイイ仕事があれば、もうこれは、国内にいる人がそういう仕事についているわけです。で、外地から帰って来た引揚げ者、しかももう四十越した女がですね、就職するたつて、イイ仕事を、そのためにわざわざアケてくれて待っているわけではない。そうしますと、いわば日本社会に対する新入りとして、一番経済的にもめぐまれない仕事を、わたくしの母親はしなければならなくて、わたくしはそのかせぎによって育てられなければならなかったっていうことになります。結局、いわば日本が戦争によって負けたあとのいろんな具合の悪いことを、主として経済的な面ですけれど、経済的な面で一番敏寄せになるようなポジションに自分がいるところから内地の生活を始めたっていうことがあるわけです。

その時に、わたくしが文学に、文学の中で何に一番共感を持ったかという、これは、社会抗議の文学っていったらいいでしょう、世の中に対する抗議をする文学、例えば、古典的な作品でいいますと、ストー夫人の「アンクル・トムの小屋」ってのがありますね、アメリカの奴隷制の問題を扱った小説ですけれど、そういう

ふうな小説ですね。つまり、社会抗議の文学、正義を願望する文学って言ったらいいでしょか。日本でわたくしが戦後出会ったもので言いますと、日本の近代文学の中のプロレタリア文学と言われるようなものがあるわけです。

例えば、小林多喜二であるとか、徳永直であるとか、黒島伝治であるとか、現在はあまりはやってはいない文学ですけども、ちょうど日本の敗戦の混乱期の中では、そういうふうな文学が読まれるひとつの根拠があった。近代文学の中でも、プロレタリア文学というのは、戦前の国家の力によっていろんな弾圧を受けて、結局、国家の力によって庄殺された文学ですから、そういう文学には戦後の自由の中で、復活して来るものもあったし、それから、みんなが貧しい生活をしていましたから、そんな中で読まれる理由というものもまたあった。そういう時代にわたくしは少年期を迎えています。

わたくしは、やはりそういう文学を一所懸命耽読した少年で、実はわたくしは中学生の時、初めて小説書いたのですけれども、その時の小説ってのは、まさにそのプロレタリア文学でした。わたくしのクラスにいた、あんまり勉強の出来る子ではなかった、とても悲惨な生活をしている子供の姿を見て、わたくし以上に大変だと思つてショックを受けたのを、覚えてるんですけれど、その子供のことをテーマにした小説でして、いま読むと何だかお尻がモゾモゾして気持ちが悪いですけれど、そういう題材を当時書いているんですね。そういう子供だった。

わたくしはそのころ何を望んでいたかと言つて言つると、スーパー・マンを望んでいた、と思うわけなんです。こんど『スーパー・ガール』

という作品も来るそうで、これは是非見たいと思つてるんですけれど(笑い)、ともかく、スーパー・マンもスーパー・ガールも、ワンダー・ウーマンも大変好きですが、それはともかく、つまり、これはわたくしにとつての正義願望というものでしょう。じゃあ正義とは何かと考えると、それは「先生、何とかちゃんが僕をいじめたよ」って言いに行くとしますと、そうするとそこでは、その女性の先生がスーパー・ガールなんです。それで何とかちゃんに「おまえ、あの子をいじめて駄目じゃないの」と叱つてくれると、「パンザイ」って僕は陰の方で喜んでいうっていう、いわばそういう構図なんだと思うんです。ですから、一種の超越的な力っていうか、そういうものを頼りにして復讐を遂げるっていうことだったんじゃないかと思うわけです。ですから、わたくしは、そういう意味では、復讐心のかたまりみたいなものだったんだらうと思う。正義ってのは、ひとつの大義名分ですからね。水戸黄門さんの印籠みたいなものですから、バツと出て来れば、どうしようもないようなものがある。そういうものを頼りにして、復讐を遂げようとしていた。そのために、プロレタリア文学とか、戦後、当時その勃興期にあった、所謂民主主義文学と言われるようなもの、新日本文学会の宮本百合子さん、中野重治さんなんかが中心になってやっていた文学運動があるんですけれど、そういう文学運動に、わたくしが共感を持つていったと言えようと思います。

そこでひとつ、注意しておかなければいけないことは、そういう文学自体が、つまらなかつたとは言えないとわたくしは思うわけです。もちろんその中にも優れた文学はたくさんあった。ただわたくしは、そういう、いわば卑小な私たちで、それを自分の都合に合わ

せて引きずりおろして、自分のために利用してはいたんではないかと思ふわけなんです。優れた文学者が、優れた仕事を、そういう時代だけれどみんなしてたつて言えると思ふんです。しかし、わたくし自身は、どうもそうじゃなくって、誰かの言葉を借りて言えば、山の峰を越えるんじゃない、その山の一番低い鞍部を越えた。低い部分を、そうやってわたくしは越えたって思います。

まあ、そうしたことが、いわばわたくしの文学の始まりみたいなものなんです。ただ、だんだんわたくし自身が、それでは気が済まなくなつて行くつていうことが、その次に起こつて来た。それはどういうことか、と、ひとつは、やはり文学つていうものの偉大さつていうのか、言葉つていうものの偉大さつていうことがあると思ふんです。それはつまり、たとえわたくしにとつて、いわば自分の手製でつくつた正義つていう観念であつたとしても、正義つていう観念自体は、やはりひとつの普遍つていうものに向かつて広がつて行く観念だつていうことが言えると思ふんです。そういうものと、文学の言葉つていうものを媒介にしてつき合つて行くつていうことの中で、言葉自体の持つている高さつていうものによつて、だんだんわたくしが、少しずつ、その自分つていうものを、変えて行くつていうことが出来て行くつたんじゃないか、そういう言葉に導かれて、少しずつ変わつて行くつていうことが出来たんじゃないだろうか。今ふり返つてみるとそんなふうにあります。

そして、それから自分自身が弱者であるつていうことが、やつぱりだんだん理解されて来たつてこともあるんじゃないかと思ふんです。弱者つていうものは、だいたい他人には何も与えないものなんです。弱者つていうのは、ケチなものなんですけれど、いや、ケチ

つていうといけませんけど、余裕のない人間なんです。ですから、例えば、芥川龍之介に「蜘蛛の糸」つて作品がありますけれど、あの中で、蜘蛛の糸を遣いあがつている人たちつていうのは、あれは、健陀多を含めてみんな弱者なんです。で、自分自身のことしか考えることが出来ない。他人のことを思つたり、他人に何かを与えたりすることが出来ない。憎しみつていうのは、わたくしは、決していけないとはいちがい言えないつていうふうには思ひますけれど、憎しみつていうものにだけ自分が身をまかせてるつていうことは、やはり何か、情無い。わたくしは、それじゃあいけないんじゃないか、つていうことをだんだん考え始めたのではなかつたか、と思ふわけです。

わたくしがある時、ある詩人に会いましたら、その詩人が宮沢賢治の話をしてくれました。わたくしは大変宮沢賢治が好きだもんですから、その話を興味を持って聞いたんですが、その詩人が、宮沢賢治つていう人は資産家の出身であるだけけれども、貧しい人間の心の底の方までずつと見通す力を持ってつた。そういうところが、宮沢賢治の偉大だつたところんじゃないか、と、言つてくれたことがありまして、その時に、わたくしは、ハツとしたことを覚えています。

で、わたくしは、ある時、花巻に行きまして、宮沢賢治がおりました家を訪ねて行つたつていう。宮沢賢治つていう人は、御存知のように、晩年、羅須地人協会つていう、いわば農村文化運動を一人始めるわけです。ね。「農民芸術概論」なんていう大変不思議な、実践と芸術つていふしよになつたような、ファンタスティックなものを書くわけですけれど、それをうけたような羅須地人協会を

始めるわけです。どこに事務所を置いたかって言うと、宮沢家の別荘を使うわけです。宮沢家っていうのは、岩手県花巻の大変有名な実業家の一族で、お母さんの方が今でも花巻では大きな力を持っている宮沢なんとか商店っていうところの出身なんですけれど、花巻の空港のコーヒール・ハウスなんてのも、その経営です。あの辺の人、特に女の人人なんか、母親も宮沢家で働かせてもらったし、自分も宮沢家で働いているというのを誇りにしているようなところがある。給料のほうはあまり高くないそうなんですけれど(笑)。そういうふうな、実業家として地方の精神的な支柱にもなっているようなお宅なんです。宮沢家というのは、そのいわば御曹子みたいなのが、宮沢賢治。その宮沢家の別荘というのは、下根子^{しもねこ}校^まって、花巻市のはずれにあるんですけれど、わたくしは、そこへ行って見たんですが、道路から細い道を入れてずーっと行きますと、敷地がひろがっているのにであうのですが、その先がちょうど崖になっておりましてね、崖の上が高台みたいになっているんですよ。崖の高台のところに、その羅須地人協会の建物だけが立っていたんですね。今はそこではなくて、花巻農業高校にその建物だけは移管されておりますけれど、建っていた場所は、その崖の上なんです。わたくし、そこへ行って見ましたらですね、もう一望のもとにリンゴ畑と水田がそこから見渡せるわけですね。わたくしは、そこへ立って下を見おろした時に宮沢賢治っていう人のことが、ハッと判ったような気がしたんですね。

それは何故かって言うと、宮沢賢治は、御存知のように、「イーハトーボ」っていう岩手県をもとにしたドリムランドの概念をつくりますよね。「イーハトーボ」っていうファンタスティックな概

念というのは、ここに立ったときに出来たんじゃないか、というふうにわたくしは思ったわけなんです。貧乏人のわたくしがヒノクレて言いますと、仁徳天皇だなんていうふうに思ったわけなんです。仁徳天皇というのは、御存知のように、高い丘の上にあがりまして、あたりを見たら民のカマドから煙があがっていない。これは税金をマケてやらなければダメだっていうんで、その後、税金をマケて三年目にまたあがって見たら、こんどはカマドから煙があがって、今日。あー良かったって、民のカマドはにぎわいにけりって、今日の皆さんはお若いからそんなことを知らないかもしれませんが(笑)、そんなこと言って喜んだって話があるわけです。わたくしはそういうふうな、宮沢賢治のことを仁徳天皇だと思って。つまり、「イーハトーボ」っていうような概念を作って用いるということ。これはやはり、その土地の豪族とか地主の発想なんだなって。そういった出身の人間だから、上から俯瞰してそこは自分の土地だと思って思ひ込むことが出来るから、それを自分の心の領土にすることが出来るんだ、というふうなその時わたくしは思ったんです。それは、だから僕の立場とは全然違うんですね。わたくしは、御存知のように、火の見櫓の下からなんです。火の見櫓の下にいる人間。僕とはまったく反対の視点のところにいるのが、宮沢賢治。わたくしは、こういうふうな思っています。

ところが、その宮沢賢治の作品を読むと、そのわたくしがうたれるわけですね。例えば「よだかの星」を読むと、わたくしは、本當にうたれるわけです。宮沢賢治の心というのは、火の見櫓の下から見上げてわたくしをうつつ力を持っている文学を作っていた。いわば底辺の人間にまで光をあてる事が出来る、そういう深い目を

持っている人だということが言える。わたくしが宮沢賢治の文学を素晴らしいと思うことが出来るのは、実は宮沢賢治が自分たちと同じ階級の仲間のことばかりを思っていたんじゃないかと、下の方の底の方にいる人間のことまで、その心まで貫通した目で、見ることが出来たというところにある、ということをやたくしは思ったんです。

わたくしはそのことを思った時、こんどは逆に、自分は底辺にいるから、底辺の人間のことだけわかればいいんじゃないんだと思っただ。人間の持っているいろんな問題っていうのは、何も、自分自身のかかえている問題がすべてじゃないんだ、自分の問題さえ解決すればいいんじゃないんだ。この世界総体のことを、見上げ、見抜く目を持たなければ、良くも悪しくも、そういうものを見抜く目を持たなければ、わたくしの文学というのは、成り立たないんじゃないか、とそういうことを思うようになったんです。……いわば、わたくしの文学だけでなく、われわれの文学というものは、その往復するような視点を持つことこそ大事なんじゃない、だらうかと思っただ。

わたくしの二十代のことですけど、そのころわたくしは、アメリカの黒人作家ジェームズ・ポールドウィンの作品をいくつか読みました。またいくつかエッセイを読みました。この人の文学は黒人の文学ですから、最初申し上げましたような社会抗議の文学、プロテストの文学の範疇に入ると一応は言えるかも知れないんですけど、わたくしが、読んでみた時に、この人の文学は、違うな感じがした。虐げられているものが、単に虐げられているんだから、自分たちを解放してくれ、というだけ、悪い奴をやっつける、というだ

けの文学じゃないんだ、もつと違うものを持っているんだな、ということを痛感したことを覚えてるんです。

ポールドウィンに「次は火だ」っていうエッセイがあります。これは、ポールドウィンが自分の甥っ子さんに、手紙を出すかたちのもので、黒人の甥っ子さんもやはり黒人差別の問題で悩んでいる。その中に、こういう一節があつたんです。わたくしはこの一節を読んだ時に、何か、目から鱗がとれたような気がした。ちよつとその一節を読んでみます。こういうことを言っているんです。

黒人は白人の社会の中で、恒星のような役割を……

遊星、恒星って言いますね、遊星ってのは、例えば、地球とか火星とか木星とか、空を動き回っている星、プラネットですね。それから恒星っていうのは、勿論動くんですけど、何百万年かたつと位置が変わるんですけど、われわれが見ている範囲ではジッと動かない。例えば、オリオン座のベテルギウスであるとか、リゲルであるとか、白鳥座のデネブであるとか、ああいっただ星ですね。そういう星のことを言っているわけですが……

黒人は白人の社会の中で、恒星のような役割を、不動の柱のような役割を果して来た。だから、黒人が定位置を変えると、天も地も根底から揺すぶられてしまうのだ。白人が自由になるまでは、われわれも自由にはなれないのだ。

こういうふうにポールドウィンが言っているんですね。わたくし

は、この言葉を聞いた時に目から鱗が落ちたような気がしました。

それまでわたくしは、アメリカの社会の中で不動の定位を保っているのは、白人だと思っていた。不動の柱の役割、恒星の役割を果たしているのは白人であってその白人の回りを黒人はウロウロしているという構図で、アメリカ社会を考えていたんですね。ところが、ポールドウィンはその逆を言うわけなんです。黒人がその不動の位置について、白人の方が回りをウロウロしているから、黒人が位置を変えようとしたりしたら良いか判らなくなってしまう。今までのような奴隷の地に位甘んじていた黒人じゃなくて、その黒人たちが目覚めて、自分たちの位置を変え始めると、白人の方はどうしたらいいか判らなくなってしまう、ということを書いてあるわけなんですけれど、この発想の中に、アメリカ社会をこれからどういうふうに考えて行くかっていう時に、白人よりもむしろ虐げられている黒人の方が責任を持つべきなんだということを、彼は言いたいんだ、とわたくしはその時感じとったんじゃないかと思えます。

いじめられている人間といじめている人間とあるとしますね。そうした時、どっちの方が深くその体験が心に残るだろうか。いじめている人間といじめられている人間という、いじめている人間はもしかすると、とくに底意地の悪い人の場合は、少し楽しんでいっているということもあるかもしれない、いじめることだね。その人のいやしいというしかないような喜びみたいなものがあるとして、その喜びと、いじめられている人間の屈辱とか悲しみとかいうようなものを、ハカリにかけた時に、プラス・マイナスで相殺されるだろうか、両方たした時にゼロになるだろうか。片方をプラスとして片方をマイナスとして考えた時、わたくしは、やはり、ゼロにならない

と思うんです。やっぱり、マイナスの答えが出るだろうと思うんですね。喜びの方がはるかに小さくて、いじめられている人間の苦しみの方がはるかに大きいだろう、とわたくしは思うわけです。そうすると、そこで全体のことを考えなければならぬのは、いじめられている方の人間なんじゃあないか、いじめられている方の人間こそ、ものを考えるということを一所懸命する契機を持っているのではないのか、そういう問題を持つてゐるんじゃないか、というふうに思ったわけです。そして、その時に問題になるのは、いじめられている人間だけが問題になるんじゃないかと、いじめてる人間もまた救われなければならぬ。いじめている人間も同時に、救いようのない存在であるわけなんです。いじめられている人間も救いがないけれど、いじめている人間も救いがない。そこで救われなきゃならないのは、その両方じゃあないか。文学の仕事っていうのは、もしかすると、そういうふうなこと、つまり、われわれが出会っている全現実って言ったらいいでしょか、そういうものを変えることが全部その人間的現実を変えるということが、実は大切なことじゃないか。そういうふうな、わたくしは、思うようになった。そういうふうな考えるようになってから、こんどはどうなったかと申しますと、公正というか、公平というか、そういうものなんだん関心を持つようになつて来た、ということが言えるように思うんです。

わたくしは、ある時、トルストイの「アンナ・カレーニナ」という小説を読み返したんですね。わたくしは、大学でロシア文学をやりましたので、学生時代にも「アンナ・カレーニナ」は読んでみなければ、その時は、十九世紀小説ってのは退屈なもんだなあ、な

んで生意気なことをレポートに書いて先生に怒られた。それで、三十をかなり過ぎてから、もう一回チャンスがありました、読み返してみたいんです。御存知のように「アンナ・カレリーナ」って言うのは、姦通小説なんです。アンナ・カレリーナっていう、美しい官吏の奥さんが、ウロンスキイっていう美貌の青年と浮気をして、恋愛をして、いっしょに暮らす。家庭を放り出していっしょに暮らして、そうして、結局自殺してしまうという、大変悲しい物語なんです。それを、二度目に読み返してみても、驚いた。今わたしが必要としたのだと、いかにもアンナ・カレリーナは悪い女みたいに思われるかも知りませんけれど、映画ですとビビアン・リーがやりまじって、大変きれいだっただんですが、小説で読み返してみると、アンナ・カレリーナが、浮気をして、それから恋愛になって、同棲にまで発展して行くということをトルストイはアンナという女の人の一つの愛を精一杯生きたうえでの帰結みたいなかたちで描いているんです。それからウロンスキイという人物も、映画ですと何かニヤけた二枚目がやりまして、わたくしなんか見ると、いかにも憎らしい役に見えるのですが、小説を読みますと、この青年は青年で、まあ若いことは若いんだけど、一所懸命生きています。それから、アンナの旦那さんでカレリーニンという官吏が出て来ますが、これは冷たい事務的な男だつていふうちに、だいたい解説の文章などを読むと要約してあるんですね。ところが実物を読んでみますと、なるほど官吏らしいところはあるんですけど、つまるところ実にちゃや具合の悪いところがあるんですけど、つまるところ実に堂々たる立派な人格の人間として描かれているんですね。

ストイに似ているんですけどね、その奥さんになるキティという女性が出て来る。この二人の物語がまた、実はアンナ・カレリーナの物語と並行して続いております。すべて読めるようになって描かれている。これも堂々とした物語で、そういうものが、二つ続いている作品なんで、これは必ずしも姦通小説とだけは言えないんだな、と思った。特にわたくしが一番「アンナ・カレリーナ」を読んだで感銘したのは、出て来る人間が全部精一杯生きています、みんな一所懸命生きてることなんです。熱心に生きています、それぞれが自分のより良い生というものを望んで生きています。トルストイは一人も悪人を描いていないんです。それぞれ人間ですから、欠点もあり長所もあり具合の悪い点もあり、ということももちろんあるわけですけど、つまるところは、それは理解出来る、われわれが理解出来る人間として、しかもその人間がひとつの必然の中にある人間として描かれている。ところが、そういう人間が集まって、それで、事件が起こってしまう。そして起こった事件が、結局悲劇に終わってしまう。

わたくしは、それに気がついた時、ああこれは大変な文学なんだって思ったわけなんです。何て言うんでしょうか、わたくしこのころ、この世に悪人はいないんじゃないのかという考えをずっと持っているんですが、「アンナ・カレリーナ」という物語は、すべての人間に平等な権利を渡している。つまり誰かが善玉で誰かが悪玉だとか、昔絵草紙ですと、上に善とか悪とか書いてあるんですけど、判りやすくなってるんですね、善い方、悪い方ってこうハッキリ分れる。ところがそういうのがなくて、善いか悪いか判らない。すべての人間が、そういう意味で、理解され得る平等の権利を持つ

て生きている人間で、しかも、ある必然のもとに精一杯生きていく。にもかかわらず悲劇が起こった。そういうかたちで「アンナ・カレーニナ」が書かれている。これはやはり大事なことなんじゃないかというふうに思うわけです。つまり、文学というのはやはり、すべての人間に対して、ある作品の中である必然を生きる権利って言ったらいいでしょうか、そういうものを与えなければいけないんじゃないか。

今突然わたくしは、この世には悪人はいないのではないかと、というふうに口走ったわけですが、つまり、それはどういうことかかって言うと、もし人間が、本当に自分がやっていることを悪いと思うことが出来れば、人間はそういうことは出来ないんじゃないだろうか。にもかかわらずいろいろな悲惨な事件がたくさん起こるのは、われわれが、自分がやっていることが悪いって本当に認識出来ないからなんで、本当に認識することが出来ないから、われわれは、悪いことが出来る。もし本当に悪いってことを認識したうえで、われわれが悪いことが出来るんだとしたら、これは本当に恐しいことだと思ふんです。「ロス疑惑」なんて、いわれている人もいますけれど、その人が本当はどうであったかは判りませんけれど、実際ににお亡くなりになった人は何人かいらつしやるわけですよ。そういう人をそういうふうにした人はいるわけですが、その人は、やっぱり、そういうことをするのが悪いってことが完全に認識出来ないような人なんじゃないか。それがもし認識出来れば、人間ってのは、そんな行動をとることは出来ないんじゃないだろうか。わたくしは、そのくらいの人間に対する信頼を持っているんで、悪人ってのは世の中にいないんじゃないかと言っているわけなんです。

で、はなしを文学にもどしますが、そういうわたしとしては、少くとも、どの人間も、理解しようとする努力すれば、きっとその人の必然の筋が見えてくるような形で理解することができる、と思っているわけで、文学はその努力をおこたってはならない、と思うのです。実際には、こっちに能力が足りなくて理解し得ないことも、また人間の限界があつて理解し得ない場合もあると思います。しかし、文学は、了解不能の△悪▽や△不思議▽の存在を原理的に認めてはいけない。どんな変てこな人間がいて変てこなことをしても、その人のあり方は人間のあり方で、わたしたちは知る価値のあることだし、また知ることによってわたしたちの生は豊かになれるのです。文学は、そういうわたしたちの武器であり味方なんだ、と思っているのです。

時間がなくなつてしまいましたので、もう少しこの話を続けたいんですけれど、一応ここで切り上げさせていただきます。質問の中でまた話を続けたい、というふうに思います。

話を終わるにあたつて、わたくしが若いころ書いた詩を一篇、読ませていただきます。ちょうど諸君ぐらいのころ書いた詩です。これは、わたくしが大学生の時に、高円寺に「にんじん」という名前の喫茶店がありまして、その二階で六十円のコーヒーでねばりながら書いた詩です。

「スープの煮えるまで」

百年を青年で生きよう！

昔、ドリアン・グレイという若者がいて

いま ぼくというのがいて

いまに だれかがいて

それぞれ勝手なことを信じながら

こんなことを思うだろう

今年の冬は あたたかだ

肌着だけで考えることができて

ぼくは 火のうえに にわとりとじゃがいものスープを

煮る

スープは こどもたちの好きな たべもの

かすかに肉がにおう股の骨をくわえて

街路樹の下の遊び場へ走ってかえっていく

骨が減った鍋には

玉ねぎや人参を大きく切って入れ

にぎやかにすればそれでいい

人参は ぼくが好きで こどもたちはきらいだ

これは じゃがいもと一緒に潰して混ぜるか

みじん切にしないしょで食べさせる野菜

野菜を作る難しさについては

戦時にすこしだけ体験した

ぼくは人参のたねまきよりも

まくわうりや落花生にひかれた

あれから いろいろなことがあって

また いろいろなことがあって
いま ぼくはスープを作っているわけだ…

こどものころあった わからないことは

いまのぼくにもわからない

いろいろな形と色の本も見た

だけど わかったことは

古代のギリシヤ人にわからなかったことは

現代のギリシヤ人にもわかってないということだけで

つまるところ 自分で決定して信じこんでしまえ

現実化するのには自分だけだ！ と

うれしいみたいな辛い気持になって

スープをかきまわしていると

湯気が鼻づらをなで上げて せきをおこす

じゃがいもをかじりながら

大分遅くなった決心をつけてしまえ！ そのために

スープのあじつけをしなが

こどものころを思い出そう

あのころ いろんなことがすばらしくて

どんなことを おそれ にくしみをもやしたのだったか

もつとよく知りたいから

じゃがいものカロリー 人参のビタミン

にわたりの蛋白質のような力を

ぼくのものにしたいから

たたかいの百年を 青年のころで生きることが

あんがい楽なことかも知れないのだ…

スープの出来上り

こどもたちを呼びに行こう

敵寒まろすのなかで おしくらまんじゅうをしている
いろいろな味のこどもたちが

一団となって扉を破って侵入し

鍋の中には 人参だけがのこるだろう

人参は 無理にも食べる

そういう義務をあたえよう

さあ出来た

そしてこの詩も出来上ったのだ

(昭和59年6月30日、旗の台校舎における第19回・文芸学会の講演から)

新刊紹介

井上治代著 『女の「姓」を返して』

男女平等の社会なのに、結婚すれば女が男側の姓を名のるのは、現在も普通のことと、夫の家に所属するという觀念からなかなか抜け出せない。結婚により強制される改姓の苦痛を、なぜ女が背負わなければならないのか。著者の井上治代さんは文芸科七回の卒業生であるが、この問題を自分の体験を通して悩み、また問いつけてきたのである。

結婚を夢見る若い女性は、改姓にも憧れを抱くらしいが、いざ現実になれば、実に多くの矛盾に突き当たらずだ。実家の姓への愛着はもとより、働く女性には、改姓による社会的不利益がある。女だけの姉妹や、一人っ子の場合には、後継ぎがなくなり、実家の名跡は消滅し、墓も無縁仏扱いになるらしい。

日本では当然とされる夫婦同姓制も、世界では異例の少数派で、お隣の中国や韓国、ヨーロッパ諸国では、夫婦の姓には選択の自由があり、別姓で通せる国が圧倒的に多いという。日本でも昔は夫婦別姓で、法による強制は百年の歴史しかなく、つきつめれば、明治国家が制定した戸籍法の問題に行きあたる。

真に平等な社会や家族関係はどうすれば可能か。著者は具体的に考える。ただ論ずるだけでなく、自分でも実践する井上さんは、自由に生きる女の立場から、多くの人の体験を聞き、この本をまとめあげている。結婚や人生を考える若い人たちに、是非読んでほしい一冊である。

(田川邦子)

◇B6判、二八六ページ、一三〇〇円、創元社(大阪)